東海大学菅生高等学校中等部

# 挑戦し続ける教育者が描く、子どもたちの「生きる力」

## 布村浩二校長に聞く

元ラガーマン・経営者　立石 哲也の
体当たりインタビュー

布村浩二（ぬのむら・こうじ）
京都教育大学にて小中高の教員免許を取得。公立高校で約11年間数学を教えた後、東大寺学園に移り25年間勤務。59歳で退職し上京。個別指導塾の経営に携わりながら、5つの私立学校でアドバイザーを務める。東海大学菅生中等部兼菅生学園初等部校長に就任後、わずか2年半で中学入学者数を約1.7倍に増加させるなど、精力的に学校改革を推進。FM ラジオ番組にも出演するなど、多方面で活躍中。

医師を志して進学した大学で、口いっぱいに歌を歌う小学２年生の姿に心を打たれ、教師の道へ。公立高校で 11年、関西の名門・東大寺学園で 25年――数学教師として子どもたちと向き合い続けた布村浩二校長は、59歳で新たな挑戦を求めて東京へ飛び出した。「授業ができなくなるなら、新しいフィールドで教育に挑みたい」。その情熱が安定を捨てる決断の原動力だった。転職サイトに 90件応募し、フランチャイズ塾を経営し、5つの学校のアドバイザーを務めた末にたどり着いたのが、東海大学菅生中等部兼菅生学園初等部の校長という現在の立場だ。着任からわずか２年半で中学校の入学者を 1.7 倍に押し上げ、40カ所以上の改革に着手。オンライン補習と対面指導を組み合わせた「トライアングル学習」、企業と連携した探究学習、AI教育の導入――次々と打ち出される施策の根底にあるのは、「この子たちの可能性を最大限に引き出したい」という揺るぎない信念だ。関西と関東の教育文化の違いを肌で知り、進学校から地域密着校まで幅広い現場を経験してきた教育者が語る、学校改革の現在地と未来像を聞いた。

## 医師志望から教師へ。

### —— 小学生の歌声が人生を変えた

**立石**：本日は東海大学菅生高等学校中等部の布村浩二校長先生にお話を伺います。まず、先生が教師になられたきっかけから教えていただけますか？

**布村**：最初は医者になりたくて、京都府立医大を目指しましたが、口をいっぱいに開けて歌を歌っている小学生の姿を見て、「あ、やっぱり教員になりたい」と思いました。その場で医大を辞める決心をしました。

**立石**：いきなり医学の道を捨てるとは、すごい決断ですね。

**布村**：そうですね。それから京都教育大学の小学校課程に入りました。小学校の免許だけでなく、中学高校の免許も取っておこうと思って。ところが卒業する年、小学校の教員採用がゼロでした。「ゼロってどういうこと？」と思いましたが、気を取り直して公立高校の数学教員として11年勤めました。

**立石**：その後、関西の名門校の東大寺学園に移られたんですね。

**布村**：赴任していた高校で、京都大学など進学実績を出していたので、東大寺学園から「数学の先生を探しているから来ないか」と声をかけていただきました。それで 25 年、59歳までお世話になりました。

## 59歳の決断

### —— 新たな挑戦を求めて東京へ

**立石**：25 年もいらした東大寺学園を辞められたのは、どういう経緯だったんですか？

**布村**：60 歳を前にして「まだ体が動くうちに新しいことに挑戦したい」という思いがありました。そこへ学校から教頭の打診がありました。でも教頭は授業を持たないので、授業ができないなら新しいフィールドで教育に挑もうと考え、思い切って東京へ出てきたんです。

**立石**：何も決めずにですか！

**布村**：夢見る大学生みたいですよね（笑）。東京に来て住むところだけ決めました。関東の教育現場を見てみたかったし、教育以外のことをやるにも東京の方がチャンスがあると思いました。転職サイトで 90 件ぐらい応募しました。エンタメ分野まで幅広く挑戦しました。

**立石**：結果はいかがでしたか？

**布村**：最終的にご縁があったのは塾業界でした。教員という仕事は専門性が高い分、異業種への転職は簡単ではありません。でも逆に言えば、それだけ教員という仕事には代えがたい価値がある。子どもたちに向き合い続ける情熱を持った人だからこそ務まる仕事ですし、一般企業の方がすぐにできる仕事でもないと思っています。

## 塾経営で広がった教育の視野

### —— 現場から学ぶ教育の多様性

**立石**：東京に来て、最初に塾の経営もされていたんですね。

**布村**：個別指導塾のフランチャイズに加盟しました。現在も経営は続けています。運営は別の方に任せていますが、公立中学校や小学校の生徒たちがどのような環境で学んでいるのか、教育の最前線を自分で体感する場だと考えています。

**立石**：実際に現場を見て感じることは？

**布村**：公教育にはまだまだ改善の余地があると感じています。評価制度をもっと細やかにすれば、一人ひとりの子どもに合った学びを提供できるはず。だからこそ私学の役割は大きいと思っています。個別最適な教育を実現するために、私たちができることはたくさんあります。

## 東海大学菅生の校長就任

### —— 2 年半で入学者 1.7 倍の改革

**立石**：どのような経緯で校長に就任されたのですか？

**布村**：塾を運営しながら、5 つの私立学校のアドバイザーをしていました。菅生にはアドバイザーとして関わる中で「この学校にはポテンシャルがある。こういうことをやったらもっと伸びるのに」とたくさんのアイデアがありました。校長の打診をいただいた時、「東京のことも多摩地域のことも何もわかりませんが、いいんですか」と聞いたら、「先入観がないからこそいい」と。そのまま、温めてきた構想を次々と実行に移しました。

**立石**：着任してから２年半で中学入学者が 1.7 倍になったと伺いました。

**布村**：60 人ぐらいだったのが今 105 人です。40 カ所以上の改善に着手しました。部活が盛んな学校の良さを活かしながら、アフタースクールの質を高め、オンライン学習を導入し、探究の授業も取り入れました。名刺もこの２年半で 931 枚配りました。年間約 300 枚。自分自身が広告塔になって、お寺でお話しするし、スイミングスクールで待っているお母さんに講演するし、ロータリークラブでもライオンズクラブでもお邪魔して、学校の取り組みをお伝えしています。

**立石**：校長自ら営業マンのように動かれるんですね。

**布村**：地域に根差した学校でありたいと思っています。実際、地元からの入学者が着実に増えました。女子の在籍比率も大きく変わり、以前は男女比が３対１で男子が多かったのが、現在は３対２まで女子が増えてきています。女子が増えると学校全体が活気づきますね。スポーツ目的で入学する生徒の割合も変化しています。以前は３分の２がスポーツ関連でしたが、今は半数以下。「勉強もしたい」「いろいろなことに挑戦したい」という生徒が増えてきているのは嬉しい変化です。

## 「トライアングル学習」の仕組み

### —— オンライン×対面×部活の両立

**立石**：部活動をしている生徒にどのように学習面でフォローをしていますか？

**布村**：３つのポイントがあります。まず、部活を６時半までに集中してやらせること。メリハリをつけることで、学習の時間をしっかり確保します。次に、夜８時半から家庭でオンラインのリアルタイム授業を入れたこと。これで家庭学習の習慣がつきます。そして３つ目が、放課後の対面補習です。この３つが三角形のように連動しているんです。

**立石**：オンライン授業はどのような仕組みですか？

**布村**：メタバース的な環境を使っていて、生徒が問題を解いたらすぐにスタッフのもとにデータが飛んで、添削されて戻ってくる。20 人いたら 20 個のモニターで全員の手元を見ているので、一人ひとりにきめ細かいサポートができます。リアルに先生が横について教えてもらっているような感覚ですね。オンラインの担当者と学校の教員は LINE で繋がっていて、「今日はここが苦戦していたのでフォローお願いします」といった連携もリアルタイムで行っています。

## 探究学習の三本柱

### —— 生物多様性・都会型農業・地域活性化

**立石**：探究学習にも力を入れていらっしゃるんですね。

**布村**：３つの柱があります。生物多様性、都会型農業、そして地域活性化です。生物多様性は大学の専門の先生に来ていただいて、実際に山に入って学びます。都会型農業は企業と連携していて、循環型農業のシステムを体験できます。魚の老廃物を含んだ水を上から回してハーブを育て、浄化された水がまた魚に戻るという仕組みです。

**立石**：企業連携のパートナーとは？

**布村**：社長は女優の小林涼子さんで、NHK ドラマ『虎に翼』にも出演されていた方です。エンタメ界にいるから発想がとにかく面白い。国土交通省とも関係を持っている注目企業で、高輪ゲートウェイにラボも出しています。そこに見学に行って体験させてもらったり、「グリーンインフラ」をテーマにした探究もやっています。慶應 SFC の田中茂範名誉教授にもご協力いただいていて、探究のテキストも完成しており、いつでも本格的に動ける体制が整っています。

## AI教育の導入と英語教育

### —— ICTを武器にする子どもたち

**立石**：AI教育にも取り組まれているとか。

**布村**：東京大学の先生に来ていただいて、付属の小学校１年生から AI に触れられる環境を作りました。クラウドにサーバーを設けているので個人情報も安全に管理できます。小学校の高学年では基本的なプログラミングも全部できますし、ロボットも扱っています。Python に触れている子もいますよ。

**立石**：英語教育はいかがですか？

**布村**：実はあまり外に発信できていないんですが、付属小学校6年生の3分の１ぐらいが英検準２級を持っています。かなり英語力のある子が育っていますよ。テンプル大学の学生との交流もありますし、新しいプログラムで世界 64 カ国とリアルタイムで繋がって、掲示板を使ってやり取りする取り組みも始めています。興味を持った国の子とリアルタイムに出会える――そのワクワク感こそが、子どもたちの学びの原動力なんです。

## 「ハテナとビックリマーク」の教育哲学

### —— 教えずに学ばせる数学の醍醐味

**立石**：数学教育について、先生独自の哲学があると伺いました。

**布村**：よく言うんですが、学びは「ハテナ」と「ビックリマーク」が螺旋状に上がっていくものなんです。まず最初に「なんで？」というクエスチョンマークが出る。なぜそういう仕組みになっているのか。それに対して自分なりの答えを見つけて「あ、そうだったんだ！」とビックリマークが出る。そしてまた「じゃあこの場合はどうなるのかな？」と新たなハテナが生まれる。この繰り返しが本当の学びなんです。

**立石**：具体的にはどういうことでしょうか？

**布村**：例えば「$ax^2+bx+c=0$ を解いて」と言われたら、多くの人は x の二次方程式だと思うでしょう。でも「x について解け」とは言っていないから、x が変数とは限らない。「x について」と言ったとしても、$x^2$ の係数 a がゼロかもしれない。そうしたら二次方程式ですらない。a も b もゼロなら c=0 で、方程式にすらなっていない。こういう場合分けが全部子どもの中から出てくるようにすると、２時間ぐらいそれだけで語れるんです。「教えずに学ばせる」――数学は本当にそういう教え方がしやすい教科なんですよ。

**立石**：先生のような授業ができる先生は少ないのでは？

**布村**：以前、神奈川県のある私立学校で授業を見学させてもらったことがあるんですが、先生方がまさにそれを実践してました。クラスの３分の２以上が同じハテナを感じる投げかけ方をして、３分の２以上がビックリマークに変わる瞬間があって、残りがまたハテナを持って授業が終わる。見事でした。こうした授業ができる先生を増やしていくことが、日本の教育全体の課題でもあると感じています。

## 一人ひとりの可能性を信じて

### —— 素直さという最大の武器

**立石**：御校の生徒さんたちの魅力について教えてください。

**布村**：この学校の生徒たちは、本当に素直で人間的な魅力にあふれています。心配りや気遣いができるし、人としての温かさを持っている。実はこれは、教育において非常に大きな強みなんです。偏差値だけでは測れない、人間としての豊かさがある。私が 37 年間さまざまな学校を見てきた中で確信しているのは、素直さは最大の伸びしろだということです。

**立石**：具体的にはどのように伸ばしていくのでしょうか？

**布村**：生徒たちの持っている人間力を土台にしながら、「生きる力」を育てていきます。車に例えるなら、急いで目的地に向かうだけがドライブではない。景色を楽しみながら、自分のペースで確実に前に進んでいく。その過程でエンジンも大きくなっていく。実際、医学科コースの成績は２年で偏差値が８から９ほど上がっています。素直だからこそ、正しい環境を整えれば着実に成長するんです。

## 学びの出発点は小学４年生

### —— 「比」の感覚が未来を拓く

**立石**：算数教育では、何年生が大事だとお考えですか？

**布村**：小学校４年生だと考えています。以前は５年生だと思っていたんですが、付属小学校の生徒を２年半見て確信しました。４年生で「比」の捉え方ができるかどうかが分かれ道なんです。例えば３分の１と２分の１でどちらが大きいか。数字だけで見る子と、一つのものを３つに割った大きさと２つに割った大きさでイメージできる子。この差が４年生で出てきます。ここで量的な感覚を丁寧に育ててあげれば、そこからどんどん数学の世界が広がっていくんです。

**立石**：先生は、どの子どもにも可能性があるとお考えですか？

**布村**：はい。ちゃんと育てられる力のある人と出会えれば、小学校４年生から始めれば、誰でも大きく伸びると信じています。一人ひとりの性格をしっかり見て、その子に合った言葉かけやタイミングを見極めることが大切です。私は37年間、まさにそれをやっていました。

## 先生たちと共に成長する学校

### —— 自走できる組織を目指して

**立石**：先生方の成長についてはどうお考えですか？

**布村**：先生たちには「一緒に変わっていこう」と伝えました。改革は校長一人ではできません。先生たち自身が成長し続けることで、学校全体が変わっていく。今、先生たちは本当に頑張っています。私が思い描くスピードとは違うこともありますが、確実に変わりつつある。その姿を見ていると、この学校の未来は明るいと感じます。

**立石**：最終的にはどんな学校にしたいですか？

**布村**：校長が代わっても、学校の魅力が持続する――それが私の目標です。先生たちが自走できるようになれば、この広大な敷地と恵まれた環境を活かして、本当に素晴らしい学校になります。子どもたちには、自分で考える力を身につけてほしい。この子たちは素直だから、伸びしろは無限大です。部活もできて、探究もできて、学力もつく。そんな学校をみんなで作っていきたいですね。

## これからの挑戦

### —— 幼児教育から始める非認知能力メソッド

**立石**：今後の展望をお聞かせください。

**布村**：実はもう一つ、起業したいなと思っていることがあるんです。幼児教室のメソッドはたくさんあるけれど、小学校低学年向けの非認知能力を鍛えるメソッドがないんです。幼児は先生と児童の関係で鍛えられるけど、小学生になった途端、人との関わりが増えて意識が変わるから、純粋に非認知能力だけを鍛えることが難しくなる。その小学校低学年向けのメソッドを作りたいんです。文京区や渋谷区あたりで場所を探しているところです。

**立石**：先生のバイタリティには本当に驚かされます。本日は貴重なお話をありがとうございました。

**布村**：こちらこそ。しゃべることが山ほどあって、もう終わりですか（笑）。

元ラガーマン・経営者
立石哲也の体当たりインタビュー
著者：立石 哲也

立石 哲也
1975年生まれ。現在､東京都、神奈川県で個別指導塾を運営。教室運営の傍ら､「子どもたちに幅広い選択を！」という想いから、ONETES 株式会社で教育統括コネクターで活動中。現在は YouTube 動画、合格ONEテスト（旧 合判模試）「偏差値５を上げる」に出演。また、この対談記事を５年間まとめた本を Amazon kindle 版で絶賛販売中！！

**【取材後記】**

朝４時50分に起床し、片道２時間10分の通勤。睡眠時間はわずかだという。普通であれば限界を感じるはずの生活を、布村校長は「毎日楽しい」と笑い飛ばす。その笑顔の源泉は、37年間の教師人生で培った圧倒的な経験値と、「ここでは自分の経験外のことばかりやっている」という新鮮な挑戦にある。東大寺学園で磨き上げた数学教育のノウハウ、入試問題作成の技術、生徒一人ひとりの性格を見抜く力――それらの引き出しを持ちながらも、「全く新しいことばかりやっているから毎日が楽しい」と語る姿に、真の教育者の在り方を見た。

印象的だったのは、「ハテナとビックリマーク」という学びの哲学を語る時の先生の目の輝きだ。螺旋状に上がっていく知的好奇心のモデルは、まさに布村校長自身の生き方そのものだろう。医師を志した少年が小学生の歌声に心を打たれ、25年務めた名門校を飛び出し、90件の転職活動を経て、今また新しい教育の形を模索している。

「先生がワクワクしていないと、いい教育なんてできない」――布村校長のこの言葉が、取材を終えた今も耳に残っている。生徒たちの素直さを「最大の伸びしろ」と語り、一人ひとりの可能性を心から信じる校長の下で、東海大学菅生は確実に変わり始めている。これからの進化が楽しみでならない。